

平成二十八年三月
聞見会新聞 Vol.

5



安心してお念仏できる場所

聞見会

法話

ちおんほうとくおんどくさん
知恩報徳恩徳讃の味わい

島根県邑智郡 遍照山明光寺

住職 西原慎治師 寄稿

御讚題

「如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし」と。

南無阿弥陀仏

ご話

皆様ご存じの恩徳讃と呼ば

れる親鸞聖人ご制作の詩がこのたびのご讚題でござい

ます。昔から音階付きで歌われている、なじみのある詩でありますね。「如来大悲」の如来は

すね。「如来大悲」の如来は

阿弥陀様のことでござい
ます。煩惱を抱えたこの私、
娑婆との縁が尽きたなら
地獄行き必定の私を心配
なさって、「地獄へは決して
行かせんぞ」と救いを建てら
れた。そのお心が如来大悲
ということであります。

「大悲」とは大きな慈悲の
心ということですね。その
ような恩を私はいただいて
おりますから、どうしたら
よいか…、「身を粉にしても報
ずべし」と親鸞聖人は味わって
おられます。なぜこのような
厳しい頂き方をされているかと
言いますと、それほど私の抱え

ている煩惱の罪の深さ、またそ
の罪深い私を地獄へは行かせず
必ずお浄土へ救ってやるぞと
いう阿弥陀様のお心の手強さ、
それを親鸞聖人は受け止められ
て返そうとしても返しきれない
ご恩への想いがこのような表現
となったのであらうと窺いま
す。

そして「師主知識」とは、
お釈迦様の説かれた阿弥陀様
の救いが、インド中国日本と
三国にまたがり時代を超え
七人の高僧方を通じて親鸞聖人
に伝わった、その高僧方を
師主知識と表現されています。
その高僧方のご苦勞・ご恩に
対しても、ほねをくだきても
感謝すべきであると親鸞聖人は
頂かれておられます。聖人
は自分の抱えている煩惱
の罪深きこと、娑婆との
縁が尽きた時に地獄必定と

おっしゃっておられますけれども、地獄しか行き場所がないと自分自身でおっしゃった。だけれどもそのような私がいるからこそ、阿弥陀様の南無阿弥陀仏のお念仏が存在している、今ここに届いておるんだ、というふうに味わっておられる。だから表裏一体、自分は地獄行き間違いなし、というのとそのよくな私がいるからこそ阿弥陀様の救いの証拠が私の口を借りて出てくださる南無阿弥陀仏のお念仏でありましたよと。

元をたどると、大悲のこころ、阿弥陀様の大きな慈悲の心、その慈悲の心でこしらえられた本願力、その本願力が南無阿弥陀仏のお名号という形となって私に届けられている。私にかけられている救いのはたらきを、私は縁が調わ

ない限り受け止められなかった。それまで生きかわり死に変わり輪廻を繰り返していたのでしようが、やっと今このたび様々な縁を頂いて、真の救いを、仏法を、聞く身に育てられました。それがこのたびの仏縁なのですね。「なるほど、そういうご縁を頂いているのだ」と知れたからには、私の今後の人生はお念仏とともに歩ませていただく人生に変えられるのです。それは、石ころの私、水に沈んでいく私がお念仏の救いという船に浮かべられ、必ずお浄土へつれていかれる身にさせられた、そういうお念仏の救いに遇っているわけです。そのような恩をいただいている私は恩に報わざるを得なくなる。それはどういうことでしょう。

『現代真宗法話集』(法蔵館)

に寺川俊昭先生の次のようなお話が掲載されておりました。

大学の廊下である学生さんに呼び止められ、「先生、やはり勉強はしなくてはなりませんね。」と声を掛けられたそうです。内心そんなことは当たり前じゃないかと思いつつ話を聞かれたそうです。実はその学生さんはお寺の出身で、父親が早くに亡くなったため、母が寺を守ってきた。自分が大学を卒業すれば否が応にもお寺を継がなくてはならない。それならば、遊ぶのは今の内、寺に戻るまで大学生活を遊んで楽しもうと考えており、毎月の仕送りを楽しみにしていた。そしていつものように封筒から紙幣を出して数えていた時にふと母親の顔が頭に浮かんだ。このお金を稼ぐのに苦労しているのだからと思っ

なった。それまで自分の身の upper を不運に思い、それを理由に勉強をせずに遊び呆けていた自分を申し訳ないとして強く反省し、このことを誰かに話さずにはおれなくなったそうです。この学生さんはこの度はじめて母の親心に出遇ったのであろうと寺川先生は述懐しておられます。私、口ではよく「親の恩」ということを言いますが、親の恩、親心に本当に出遇うということは実は非常に難しいことなのかもしれません。そして親の恩に本当に出遇ったのならば、その恩に報わざるを得なくなるのでしよう。

私が小学校二年生の時のエピソードです。いつもは学校給食だったのですが、その日は家から持ってくるお弁当の日でした。弁当を食べているときに

ご飯を落としてしまい、がっくりしていました。すると、担任の先生が「私のごはん半分食べ」と言ってくださったのでよろこんで頂きました。そのときの記憶は鮮明に残っており、私が先生からいただいたご恩は私にとっては宝物であり、胸の奥に大事にしまっています。とかく、私たちは恩を受けた時に「返さないといけない」と考えてしまいがちではないでしょうか。「恩返し」という言葉があります。物をいただいたらそれと同等なものを返して恩を返したことにする。恩返しという言葉にはそういう意味も含まれてしまっているように思えます。よくよく考えてみますと、私が頂いた物をそのまま100%返しきることには非常に難しいことだと思えます。例えば先ほどご紹介した私が小学生のころいただいた

担任の先生のご飯。その先生は御存命ですので、「先生、あのときはどうもありがとうございました」とお礼を言ってお茶碗にご飯をあの時と同じくらいの量をよそって渡したら恩返しになるかといったら、やはり恩返しにはなりませんよね。私たちが「恩返し」って言うときには、作った借りを返してチャラにしたいという損得勘定の気持ちではたらいっているように思うのです。だけれども本当は、頂いた恩というのは返しきることができません。恩をいただくということは、恩を知るということを伴います。さきの学生さんの話では、学生さんは初めて親の恩を知った。いままで十八年母親と一つ屋根の下、一緒に住んでいたけれどもはじめて親心に遇い親の恩を知った。この恩を知るといことが実は大変難しいのですね。

普段私たちは恩を返すことに躍起になってしまい、恩を知ることから遠ざかってしまっているようにも思えます。もし私が頂いた恩を心底知ることができたならば、私がするべきことはそのお心になつた行いをして恩に報いることだと自然に知れてきます。そして私は今、阿弥陀様より大きなご恩を頂いている真つ最中でありました。阿弥陀様は娑婆との縁が切れた時に地獄必定の煩惱を抱えた私が阿弥陀様と同じ悟りの世界、清らかなお浄土に間違ひなく生まれさせていただく道筋を仏事等さまざまな縁を通じて私に知らしめてくださいます。そのような他に比べるものの無いほどの大きな恩に応えるためには、その親心の中身を窺わなければなりません。その中身とは阿弥陀

陀様の本願力によって私がお念仏申す身となり、そのままお浄土行きの人生を歩ませていただくことであります。親鸞聖人の恩徳讃ご制作のお心は、決して他人事ではなく、お念仏に出遇えたことを喜ぶ私の心持でもあったのです。

南無阿弥陀仏

肝要は御文章さま

聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候ふ。そのゆゑは、もろもろの雑行をなげすて、一心に弥陀に帰命すれば、不可思議の願力として、仏のかたより往生は治定せしめたまふ。その位を「一念発起入正定之聚」とも釈し、そのうへの称名念仏は、如来わが往生を定めたまひし御恩報尽の念仏とこころうべきなり。あなかしこ、あなかしこ。

もし念仏するものは、

これ人中ふんだりけの分陀利華なり。

釋林遊 (林遊@なんまんだぶつ) 著

うちの婆ちゃん八十五。
少し痴ちほう呆ほうが始まって、
何でもすぐに忘れま
す。なんまんだぶつも忘れがち。

息子はすぐに怒鳴ります。
「こらっ、なんまんだぶつ
せんかい」

婆ちゃん念仏とな称なえます。
「ようよう言うてくれたのお。
お前だけじゃこんなこと、
言うてくれるは有り難い」

惚ぼけて念仏忘れたら、
叱りつけても念仏を、

させてくれとの頼みです。
今日の日にも分かりません。
亡くした子供の命日も、
五人も亡くした悲しみも、
みんな忘れてお念仏。

町から田舎に嫁に来て、
牛馬ぎゆうばの如くはたらいて、
田舎の暮らしになじめない、
つきあい下手の婆ちゃんに、
おやさま一緒にお念仏。
有り難かろうが無かろうが、
わけはおやさまご存じの
損と得とをいっぺんに、
なんまんだぶつと、ただもらい。

それでも時々思います。
「はあ、もっと惚ぼけんうちに、

はよ死にてえなあ」

爺ちゃんすぐに叱ります。

「おやさまのいのちやさけ、

どうにもならんこっちゃ」

愚痴をいってはお念仏。

ため息ついての称名しょうみやうに、

なんまんだぶつのおやさまが、

今日も婆ちゃんと一緒です。

聞いて聴いて聴き抜いて、

何十年も聴きました。

聴いた聴聞ちやうもんみな忘れ、

覚えた理屈もどこへやら。

それでも朝晩お勤めは、

欠かしたことがあります。

きいみよふりよおじゆによわらい。

たとえお念仏ぶつぱん飯忘れたも

あーなかしこ、あなかしこ。

七高僧しちこうそうに 御開山ごかいざん、

蓮如れんによさんも一緒です。

信じることも、知ることも、

みんな忘れて残るのは、

なんまんだぶつのおやさまの

とぎれとぎれのお念仏。

なあ、みんな忘れていいんやぞ。

惚ぼけて死のうが狂おうが

惚けたまんまがおやさまの

狂うたまんまがおやさまの

間違わさんの念仏が、

今日も婆ちゃんと一緒です。

なんまんだぶつの船に乗り、

なんまんだぶつの帆を揚げて、

なんまんだぶつの風うけて、

なんまんだぶつのおやさまの、

お浄土へ往く船の上。



昔はどこにでも、お念仏を称えなんまんだぶつを喜んだ人がいたものである。

今ははや西方仏国の住人になつてしまつたが、小生の母親もそのような中の一人だつた。まわりから「後生願い」と揶揄されながらも遠近を問わず聴聞に出かけ御法義をよろこんだものである。

観仏を勧める観無量寿経の結語には『もし念仏するものは、まさに知るべし、この人は此人中の分陀利華なり』とある。なんと、無量寿仏(なんまんだぶつ)を口称する者を仏様がほめて下さるといふのである。

善導大師はこの「分陀利華」を、分かりやすく「もし念仏するものは、すなはちこれ人中の好人なり、人中の妙好人

なり、人中の上上人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人……」(観経疏)と仰つて下さっている。才市さんや田原のお園同行だけが妙好人ではないのである。ろくなものが出入りしない自らの口からおねんぶつを称えることが妙好人なのである。

「母ちゃん惚けてお念仏忘れたら、怒りまくつてもお念仏さしてくれなあ。おや様のご恩報謝のお念仏やさけ、オメちゃんと忘れんと母ちゃんにお念仏さしてくれなあ」と常に言っていた母であつた。

念々称名即嘆仏、念々称名即懺悔。仏様の功德は仏様しか讃嘆する事ができないが、

一声一声のお念仏が、仏様をほめたてまつることになり、煩憂悩乱に明け暮れる慚愧になるとなり、とは何とも有り難いことである。

「葬式や法事のお齋に金を掛けるより、一人でもたくさんの方がお念仏を喜んで下さるようになつてくれ」という母の願いでこのサイト群は出来ています。

なんまんだぶ、なんまんだぶ……
称名相続



教聞院 釈貞保

※この文章は著者である釋林遊師の許諾をて、林遊師の運営する浄土真宗聖典電子化計画ウェブサイトに『Wikiarc』(ウィキアーク) <http://labo.wikidharma.org/>にある、「このサイトのスポンサー」ページから引用致しました。

浄土真宗聖典電子化計画『Wikiarc』(ウィキアーク)は、浄土真宗の聖典に加え、各種仏典、資料などを網羅しているウェブサイトで、どなたでも手軽に御聖教やその出処となる資料に触れることができるように、林遊師が私財を投じて構築、運営してきたウェブサイトで。

おんどうぎょう
御同行より

興禅寺さま報恩講にて(第二回)

小合あゆみさん 寄稿

※前回につづいて、小合さんの

感話です。

〈宗教について〉

少し話はかわりますが、わたしは小学校、中学校の合わせて九年間、カトリックの学校に通っていました。

その学校では、年に何回かミサに出席します。

ミサのとき、カトリックの信者さんは、一番前の席に座っています。

ミサの途中に、聖体拝領(せいたいはいりょう)という

儀式があります。

パンと呼ばれる薄いおせんべいのようなものを信者さんは神父さまからいただきます。小学校低学年だと、口を開けていると神父さまが口の中にぽんと入れてくださいます。ちょっとうらやましいなあと思いがら見ているわけです。

小学校四年生か五年生のときに、今まで私たち同じところに座っていたクラスメイトの一人が信者さんの席に座っていました。そのクラスメイトは、おとうさん、おかあさん、そのクラスメイトの家族三人で、みんな

カトリックの信者さんになったのだそうです。

あとで聞いたのですが、カトリックの信者さんになりたいた言っても、すぐになれなかったそうです。何度もシスターや神父さまから、ほんとうに信者になるのか確認され、勉強もなされたそうです。

そういえば、その学校にいた九年間、カトリックの信者になるように言われたことは一度もありませんでした。

龍谷大学に四年間通っていましたが、そこでも浄土真宗の門徒になるように言われたことはありません。

世間には教えをおしつけるような宗教や、人の弱みに付け込むような宗教もあります。ほんとうの宗教はそんな押しつけや押し売りのようなことではないのだと思います。

〈見えているもの〉

話を戻します。

仏教に縁のない生活をしていた私ですが、先ほどもちらっと申しましたように、龍谷大学で四年間学びました。

入学式の会場はできたばかりの顕真館という礼拝堂でした。

正面に「南無阿弥陀仏」と書かれていて、仏教の大学にきたのだと実感しました。

大学では一年間「仏教学」という授業がありました。特に印象に残ることはありませんでした。

こんな話を聞いたことがあります。人間は見えている風景は同じでも、見ているものはそれぞれ違うのだそうです。

みなさんはわたしのほうを見ておられますが、同じものを見ているか?といえれば少しずつ

違います。

私を見ておられる方もおられるし、阿弥陀さまをご覧の方もおられるし、ふだんは見られないご絵伝を見ている方もおられる、空模様が気になる方もおられれば、時計が気になる方もおられる。

みんな同じところにいて同じ方を向いていても、見ているものは違います。自分の興味、関心のあるものを見ています。その話を聞いて思い出したことがありません。

大学三年生、四年生の二年間、本願寺の南隣にある大宮学舎とよばれる校舎に通っていました。

大宮学舎には、京阪電車の七条駅からまっすぐ西へ西へと七条通を歩いていきます。

しばらく行くと、左手に京都タワー、右手に東本願寺が見えてきます。大きな交差点

を渡って、さらに西に向かう

と、右手奥に西本願寺、手前に興正寺、そして交番が見えます。そして、興正寺会館があつて、郵便局があつて、大宮学舎の門があります。

ところがわたしの記憶に残っているのは、交番と興正寺会館と郵便局なのです。あんなに大きな東本願寺も西本願寺も私には見えていませんでした。せつかく四年間、龍谷大学に通っていたのに、仏教は遠いところになりました。

〈クラブの話〉

さて、大学時代、何をしていたかという、いちおう勉強もしていましたが、クラブ活動もしていません。龍谷大学では放送局というのですが、普通に言えば放送部です。

放送局というクラブはちよっ

と特殊なクラブでした。

たとえば陸上部なら、それぞれの競技の練習して、試合に出ます。

吹奏楽部なら、練習をして、演奏会を開いたり、コンクールに出たりします。

ところが放送局は、自分たちの活動以外の活動もしなくてはいけませんでした。

大学祭、龍谷大学では龍谷祭といいますが、放送局として企画・番組をつくる一方で、たとえば野外ステージでの企画のためにマイクやスピーカーなどの機材をセッティングして、その機材を操作するミキサーを派遣しなければいけません。アナウンサーを派遣することもありますが、時には企画作りから関わることもあります。

ですから、十一月の龍谷祭に向け九月からずっと準備をしています。朝の九時から夜の九時

まで授業の合間を縫って準備をするという、かなり忙しいハードな毎日でした。

〈後輩の死〉

大学三年生の時、龍谷祭が終わって十日ほど経った十一月十五日の朝方、一つ下の後輩が突然、亡くなりました。突然と言っても、事故ではなく、病気で亡くなりました。

彼が小さいころ、小児ぜんそくだったということは聞いたことがありました。でも、ふだんの彼は咳をすることもなく普通に生活していました。私の目には元氣に見えていたのです。

しかし実は、龍谷祭の始まる前から随分と体調を崩していて、毎晩、床に就くとぜんそくの発作に苦しんでいたのだそうです。ぜんそくの発作を抑える「吸入器」を使って、なんとか

発作を鎮めていたそうです。

ぜんそくは体力も奪います。彼は龍谷祭が済んで、後片付けなども終わったら、クラブを休むかやめるかしようと考えていて、同じ学年の仲間に相談していたのだそうです。

最後の夜、下宿に帰って床に就いた彼は、ぜんそくの発作に襲われます。いつものように吸入器を使ったのですが、毎晩、吸入器を使っていたために薬剤が無くなっていて、発作を抑えられませんでした。

すぐに救急車を呼んでいれば、助かったかもしれません。けれど、真夜中に救急車を呼ぶことをためらった彼は、朝方まで我慢して、少し明るくなってから隣の部屋の友達に救急車を呼んでもらったそうです。しかし、間に合いませんでした。どれほど苦しかったことか。

どれほど恐ろしかったことか。このまま死ぬのではないかと考えていたかもしれません。

わたしは先輩だったのに、彼がぜんそくで苦しんでいることにまったく気づくことができませんでした。苦しみのなかで、彼は命終えていってしまいました。

厳しい言葉でいえば、わたしは彼を死なせてしまった、もっと言えば、殺してしまっただ。なぜ気づけなかったのか。そういう思いは、今も残っています。

彼の実家で営まれたお葬式の後、会葬礼状と一緒に清め塩が配られました。そのとき、ひとりの後輩が、清め塩を握りしめて「こんなもん、いらん。清め塩をまかへんかったら、あいつがついてく

るって言うんやったら、ついてきたらいい。わしが連れて帰った」と叫びました。わたしはそのとき初めて、清め塩の意味がわかりました。

亡くなった人のことを遠ざけるために清め塩をまくのだ、亡くなった人を穢れたものとしてみるのだということを知りました。

生きていようが死んでいようが、大切な後輩です。亡くなった彼を遠ざけたいと思いませんし、ましてや穢れているなど思うわけがありません。清め塩をまく必要はありません。

今になって気づいたことがあります。それは亡くなった後輩のご両親が、わたしたちのことを一言たりとも責めたりなさらなかったことです。それどころか、大きなイベントなどの時には、

差し入れをたくさん持ってきてくださるようなご両親でした。

学生の時には、そのありがたさがわかりませんでした。親とやらせていただいた、わたしがあのご両親の立場であったなら、あのような振る舞いができるだろうか？

なぜ、息子の変調に気づかなかったのかと責めるのではないだろうか。

私たちはご両親に責められてもおかしくなかったと思います。でもご両親は、まるでわたしたちのことを自分のことのように大切にあなたかく接してくださいました。

息子を失って悲しみの真ただ中にいるご両親に、わたしたちは助けられ支えられていたのだとわかるようになりました。大学を卒業し、就職し、結婚し、子どもにも恵まれました。

順風のように見えるかもしれないが、辛いことや大変なこといろいろありました。なんでこんな目にあうのか？と悩ましい日はありません。

もともと小さいころから、生きていくことはしんどいと思ってきました。居場所を見つけれなくて、「わたしは生きていていいのかな」といつも不安で自信がありません。ですから嫌なことやつらいことがあると、消えてしまいたくありません。生きていてはいけないのかなと思います。

消えてしまいたい、生きるのはしんどいと思っているけれど、それでも生かされているわたしであります。

いつのころからか、何かに行き詰って、なにかもいやだとか、もう消えてしまいたいと思うときに、彼を思い出すよう

になっていました。

彼にはきつと、したいことがあって、なりたいたいものがあつたと思います。

けれども、彼は、あの朝、すべてを奪われました。

わたしが経験している、楽しいことも辛いことも嬉しいことも悲しいことも、彼は経験できません。あの朝、すべてのものから手を離していきました。

わたしは、彼のしたかったことを代わりにするとか、彼の分まで生きるということはできません。

彼のために生きるとか、彼の代わりになにかを成し遂げるとか、そういう生き方はできません。けれど、生かされている以上、彼が経験できないできごとをしつかり受け止めていきたい。

個人的な体験、たとえば、就職、結婚、出産、育児、父親の死。

そして、社会的な体験、震災やさまざまな事件や事故。

嬉しいことも悲しいことも、楽しいことも辛いことも、あの日、彼は奪われてしまいました。

私にできることは、あの日、彼が奪われてしまった様々な体験を、私なりに受け止めること。

私はかっこいいことも、人の役に立つこともできないけれど、それらの体験から目をそらさずに、しっかりと見つめ、受けとめること。

そして、わたしが死ぬ瞬間に「とにかく生き抜いてきたよ」と彼に報告したい。そう思うようになっていました。

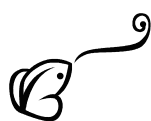
生きていくことに自信がなくて、いまでも「わたしはいなくていいのではないか」と思っている私にとって、「生き抜く」ことはしんどいことです。

わたしにとって生きることは、ちょうど「平均台」の上を歩いているような感じですよ。

ちよつとしたことでぐらついて、そして「もう落ちてもいいかなあ」と思います。

そのときに、落ちないよう支えてくださっているのは、もちろん、今一緒に生きている家族や友人ですが、それ以上に亡くなった後輩の力を感ぜません。

(次号に続く)



「たすけたまへとおもへば」

ウェブサイト「Wikiarc」より

林遊師による考察を転載

親鸞聖人には、たのむ(憑む)という、おまかせするとの意味の用例はあるが、「たすけたまえ」という用例はない。この「憑む」の語源の一つは、田の実(田で獲れる米)であるという。たしかに『涅槃経』には「命を説きて食とす」という語もあり、生命のちは食べることによって維持されるものであり食はタノミである。その意味で田の実がタノミ、タノムの語源という説はうなずける。ここでのタノムの意味は神仏に「お願いする、懇願する」という意味ではなく、自己の存在をゆだねるという意味であり、

あてたよりにするということがある。現代で使われる神仏への祈願の「頼む」や「恃む」とは意味が異なることに注意すべきである。たのむが神仏への懇願の意味になったのは江戸時代に入ってからといわれる。

「たすけたまへ」は、「タスク」という動詞の連用形「タスケ」に、尊敬の意をあらわす補助動詞「たまふ」の命令形「たまへ」の形で、「おたすけくださいませ」という意味である。

法然聖人の、真偽未詳とされる『黒谷上人御法語』(二枚起請文)には、

「仏の願によらずば、かゝるあさましきものゝ往生の大事をとぐべしやと思て、阿弥陀仏の悲願をあふぎ、他力をたのみて名号を憚りなく唱べき也。是を本願を憑たのむとはいふなり。すべて仏たすけたまへと思て、名号をとなふるに過ぎたる事はなき也。」

と「仏たすけたまへと思て、名号をとなふる」という例がある。これは「本願を憑」んで、つまり阿弥陀仏の悲願におまかせした上での「たすけたまえ」である。法然聖人は対機説法がたくみであり、このような「たすけたまえ」という人格的表現は阿弥陀仏を人格化することで聴く人に理解しやすいように法を説かれたのである。

ともあれ親鸞聖人には「たすけたまえ」の用例はない。「たすけたまえ」は衆生の側からの

救済の請求(しょうぐ)の意になるので、本願力という法による衆生への回向に立脚した親鸞聖人は使われなかったであろう。

しかし、なんまんだぶ、と仏の側からの救済の名乗り(本願招喚の勅命)を受け容れる信順の意味でとれば、「たすけたまへ」は相手の意を受けいれる許諾(こたく、むこうの言い分を許し承諾する)の意になる。救いの勅命に「それでは、たすけまへ」という意味になる。つまり、自己が先行すると救いの請求になるのだが、先行する阿弥陀仏の呼び声に呼応する場合は「勅命にしたがひて召しかなふ」の「召しかなふ」という意味の言葉になるのであった。

後年、本願寺八代目蓮如上人のご教化のスタイルについて、『御一代聞書』で、

「一 聖人(親鸞)の御流はたのむ一念のところ肝要なり。ゆゑに、たのむといふことをば代々あそばしおかれ候へども、くはしくなにとたのめといふことをしらざりき。しかれば、前々住上人の御代に、御文を御作り候ひて、「雑行をすてて、後生たすけたまへと一心に弥陀をたのめ」と、あきらかにしらせられ候ふ。しかれば、御再興の上人にてましますものなり。」

と、浄土真宗再興の言葉が「雑行をすてて、後生たすけたまへと一心に弥陀をたのめ」の言葉だといふのであった。仏の仰せに信順して、なんまんだがぶ以外の雑行を捨てて、後生タスケタマへであるから仏が先行するのである。蓮如上人も、当初は「たとへ名号をとなくとも、仏たすけたまへとはおもふべからず」「寛正二年(1462)お筆始めの御文」では、たすけ

たまへという用語には懐疑的であった。当時浄土宗の中でも盛んであった浄土宗一条浄華院流でさかんに用いられていた「たすけたまへ」という教語に否定的であったからであろう。浄華院流は、蓮如上人が吉崎に居られた当時の近江、越前で盛んであった。

もつとも、蓮如上人と浄土宗一条浄華院派との縁は深かった。継職前(本願寺八代目継職は43歳)で若い頃の貧乏寺の部屋住みであった当時の蓮如上人は、生まれた子を養う術すべがなく、浄華院などへ子を預けられた。次女見玉尼や三女の寿尊尼は浄華院見秀禅尼の弟子となつてゐる。見秀禅尼は蓮如上人の叔母である(日野一流系図)。その浄華院流の弟子であった見玉尼の往生を帖外御文で、「かの比丘尼見玉房は、も

とは禅宗の喝食なりしが、なところは浄華院の門徒となるといえども、不思議の宿縁にひかれて、ちかごろは当流の信心のこゝろをえたり。」とされているので、こうした見玉尼の浄華院での経験を知ることを通して、蓮如上人は、たすけたまへという用語を許諾の意で用いれば、浄土真宗の救いを表現するのにふさわしい言葉であるとして使われたのであろう。そのような意味では、親鸞聖人は阿弥陀仏を「法」を中心としてみるものであり、蓮如上人はその法を「人格」としてみる面があつたのであろう。浄土真宗の門徒の間で、阿弥陀仏を親さまとか阿弥陀さまと人格的に呼称するのも蓮如上人の教化の影響からであろう。ともあれ蓮如上人は、タスケタマへとタノムという教語で阿弥陀仏を人格的に表現することによつ

て、より民衆に親しく浄土仏教の意味を説かれたのであった。また、西山派の書とされる『安心決定鈔』の「機法一体」の教語(同書中の機法一体は積極的に依用されるのだが、決して往生正覚一体は使われなかった。十劫安心の無帰命に陥りやすいからであろう)を自家菜籠の物とされて当時の民衆に親鸞聖人の開顕された「ひとへに往生極楽のみち」である後生の一大事を伝え、やがて日本有数の教団である現在の浄土真宗の基盤を築かれたのであった。

たすけたまへの教語をさかんに使われた浄土宗清浄浄華院の証賢上人には『三部仮名鈔』という法語集があるのだが、その一つである『歸本願抄』は当サイトにUPしてある。より知的好奇心のある人は参照されたい。なんまんだがぶ なんまん

「感話」休題

(慈海のひとりごと)

「年年歳歳花相似

歳歳年年人不同」

(年年歳歳花相似たり

歳歳年年人同じからず)

梅も咲きはじめ、桜の時期が待ち遠しい時節、「三寒四温さんかんしゅうん」とはよく言ったもので、春日になったかと思えばその翌日には吹雪いたりする。この時期の雪は、祖母の葬式と、脚の痛みを思い出させる。

祖母の訃報を聞き、急ぎ東京から福井へ向かった。二〇〇八年二月十五日のことである。

新幹線の車窓の景色は、西に向かうにつれて雨模様となり、北陸線に乗り換えると今度は雪景色に変わっていった。

福井駅に着き、えちぜん鉄道に乗り換え、日が落ちたころ実家近くの駅で降りると、ふるさは吹雪であった。

ジャケットのフードを深く被り、ただ淡々と雪を踏みしめて、もう会うことも出来なくなった祖母の待つ実家へ向かった。自分のことに忙しくてめったに寄り付かなくなってしまっ

ていたけれども、たまに帰ると抱き合って、涙を流して迎えてくれる祖母であった。

「カタかったか？(福井弁…元氣だったかの意)」

「おばばさんこそカタかったか？」

玄関を開けても、そんないつものやり取りは、もうなかった。

ただいま、と玄関を開ける。むせ返るようなお香の香り。母が何か言いながら出てくる。仏間に入るとやつれた父の顔が最初に目に入った。「おう」といいながら顔を上げる兄。居場所がないのかウロウロと落ち着かない様子の姪っ子。いつもの静かな仏間とは違って、バタバタとした雰囲気。気の真ん中で、ストロブに

かけられたやかんの蓋が、不規則にカチカチとなっている。そして、仏壇の前には、お客様用のきれいな布団の中に横たわされたおばば様がいる。

泣いてしまっただろうか、と思っていたが、なぜだか何の感情もわかず、冷静にその情景を眺めていた。「ほんとうに死んだのだろうか？」そう思ってしまったくらい、死が現実的ではなかった。ただ、祖母の顔にかけられた白い布が、死んでいる「い」いうことを静かに表現してた。

それから数年後、二〇一一年二月二十七日、私は親からもらった名前を捨てて「釋慈海」の名前を賜たまわった。浄土真宗本願寺派の僧として、得度とくどを受けた。その得度式のあと、僧侶の姿のまま、京都の御本山から

福井県と石川県の県境にある吉崎別院まで、歩いた。

折しも季節外れの寒波が空を覆い、七日間の道中そのほとんどが雨と雪であった。饅頭笠まんじゆがさに身を守られながら吹雪の中を歩いた。少しの休憩が膝が凍らせ、一歩一歩が激痛で、その身を呪う言葉のようにお念仏を呻うめきながら歩いた。雪を踏む脚は重く道のりをより長く感じさせたけれども、靴底に踏む柔らかい雪は、まるでふかふかの絨毯じゆうたんのようにクッションになって、脚の痛みを和らげ少し嬉しかった。

その行脚中、とある場所で小さな祠ほらを見つけた。一度は通り過ぎたその祠であったが、傍らにはためく旗に記された文字が目

とまった。そこにはとある御利益がうたわれていた。思わず足を止め、しかし

「雑行雑修自力ざうぎょうざうじゆぢりきの心を振り捨てて」の言葉を思い出し、振り切って道を進めようとしながらも、しかしまた足が止まり、ふらふらと後戻りして祠を覗き、目をギョツとつむつて祠に背を向けて……、を何度か繰り返した。なんまんだぶなんまんだぶ、お念仏噛み締めながら先を急ごうと思いつつも、しかしどうしてもそのまま素通りすることができず、結局ためらいながらその祠に入った。

握りしめた小銭を投じ、手を合わせた。

「どうか、どうか……」と、その祠の主あるじに頼みに頼みおわると、祠の前で脱いだ笠をつかんで足早にその場を後

にした。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」と、心のなかで何度も何度も何かに謝りつつ、うしろめたさをごまかすように、その後しばらく大声でお念仏をくりかえしながら歩きつづけた。

あれからもう五年が過ぎた。「慈海」も五歳になった。自信のなさを僧衣でごまかし、袈裟けさの重みを「コスプレ」と茶化しつづけてたが、それもそろそろ卒業してもよい歳かもしれぬ。

なんまんだぶ

※平成二十八年三月中旬記す

ご寄稿のお願い

「聞見会新聞」では、御同行様からのご寄稿をお待ちしております。

ご法話、感話、エッセイ、読人物、聞見会新聞の感想や、ご意見などでも結構です。ペンネームや匿名でもかまいません。お念仏の同行の声を、ぜひお寄せください。

詳しくは釋慈海、もしくは「聞見会」のウェブサイト、facebookページ等でおたずねください。

あなたの「言葉」をお待ちしております。

おしらせ

会計報告

聞見会では、平成二十七年
度より、一年を一つの期と定め、
皆様よりお預かりした懇志の収
支を聞見会のウェブサイトおよ
び当紙面にてご報告させて頂く
事と致しました。
つきましては、誠に勝手なが
ら平成二十六年以前に収支に
ついては以下のように纏めた形
でのご報告となりますことをご
理解くださいますよう、お願い
申し上げます。

尚、平成二十七年の会計報
告は、聞見会新聞第六号に掲載
を予定しております。

【聞見会会計担当・山田正之】

平成二十六年以前に会計報告
収支纏め：平成二十七年四月

【収入の部】

御懇志 ￥65,500
勉強会会費 ￥24,000
慈海持ち出し ￥80,000
切手 ￥2,000
合計 ￥171,500

【支出の部】

新聞発行費用（印刷代、
発送代、その他諸経費）
￥23,890
交通費（駐車場代） ￥5,600
レンタルサーバー及びドメ
イン費用 ￥17,000
機材・備品 ￥74,741
イベント開催経費 ￥7,000
諸雑費 ￥4,665
合計 ￥132,896

【収入・支出】

￥38,604

【繰越金】

2015年4月11日現在
￥38,604

御懇志（寄付）を下された方
に、この場で御礼を申させてい
たきます。
ありがとうございます。

聞見会代表 慈海 拝合掌

聞見会念仏会

聞見会では、毎月「念仏会」を
開催しております。

聞見会の「念仏会」は、いわゆ
る「別時念仏会」とは異なり、
この身このままの心のまま、
ただお念仏を称え、この口から
聞こえるそのお念仏の響きに
身を浸してみようという会座で
す。ですから、声の調子も大き
さもそろえる必要ありません
し、ウロウロしていたって、立っ
たままでも、座っていても、た
とえ寝っ転がっていても、お念
仏が称えやすい格好で結構で
す。身も心も整え清らかにする
必要もありません。（そもそも
本当にそうでできるのは極限られ
た方だけですから……）
開催のスケジュールは、聞見会
ウェブサイトをご覧ください。

聞見会について

聞見会は、浄土真宗本願寺派僧侶釋慈海が代表を務める、お念仏の会です。

「安心してお念仏ができる場所がもっとあつたら」という思いから、この会を立ち上げました。お念仏は易行(簡単な行)と言われますが、現代社会でも果たしてそうでしょうか。

「周りの目が気になってお念仏できない」

「宗教というだけで白い目で見られる」

「お寺はいつも敷居が高くて入りづらい」

「仏教というのはどうも型ぐるしくて難しそう」

そんな声をよく耳にします。

でありました。

しかし、いつしか「賢く」なつてしまった私たちは、その素晴らしい世界を、破壊していつてしまつてはいないでしょうか。生きることの目的が、いつしか生きる満足を求めるだけになつてしまい、死を否定し、死を「空しい」ことにしてはいないでしょうか。生の行きつく先が、「空しい」ことであるならば、それはつまり、生きているこの現場も「空しい」ことにはならないでしょうか。

せん。

安心してお念仏を聞ける場所、それは、汚く、醜く、みっともなく、なさけなく生きて生きて死んでくことができる場所でもあります。

綺麗事ではないこの「生死の現場」で、どうぞ一緒に、「そのまま」のおすくいを聞くことができる場所を作っていけたら願い、この会を運営しております。

聞見会代表 釋慈海 拝

なんまんだぶ



阿呆墮落偈

前川五郎松著

《た》 第一に、困ったら何でも

お阿弥陀さまに聞くことじゃ。

それは真夜中の暗闇に仏壇の戸を開いて、如来さまに聞くことや、何とか言うて下さる。言うて下さるまで、何時間でも、毎日でも座り込みするのが一番。

うらには、親爺、あかんぞーと言うて下さった。ただ一声や。なむあみだぶつ。

《ち》 近ごろは、いろいろな宗教が盛んなようや。人間の迷いが如何に深いか、複雑かがよく現れていると思う。

神さまに頼むと、願いが叶えられるという。神さまも、さぞ忙しかろう。

《つ》 次つぎと、一難去ってまた一難。出て来る業は避けられぬ。たとえ親でも子でも、代わられぬ。「どうにでもなる」は、「どうにもならぬ」世界の中のことじゃ。

《て》 手を出すな、手を出すな、仏の帳場に手を出すな、凡夫が手を出しや極楽も娑婆になる。裸で来たで裸で還ろう。

《と》 称うれば、われも仏もなかりけり、唯なむあみだぶつ。念仏はどんなご利益あるのやら、狸爺は知らないけれど、出るにまかせて唯なむあみだぶつ。なむあみだぶつが知って居るから、うらは知る必要なし。



聞見会への

ご寄付について

「聞見会」は、皆様の御懇志(寄付)によって運営されております。ご寄付は、左記口座へお振込みください。大切にお預かりしまして活用いたします。

◆振込先◆

ゆうちょ銀行

記号：13310

番号：5415221

なまえ：モンケンカイ

※銀行からのお振込みの場合は

左の口座へお振込みください。

店名：三三八(読み サンサンハチ)

店番：338

種別：普通預金

口座：0541522

聞見会新聞 第五号

平成二十八年三月十五日 発行

発行 聞見会

発行人 釋慈海

編集 釋慈海・山田正之

この配布物および聞見会についてのお問い合わせは、左記までご連絡ください。

〔住所〕

〒919-0476 福井県坂井市春江町針原20-31 聞見会 釋慈海宛

〔電話番号〕

090-3295-8969(釋慈海)

〔メールアドレス〕

info@monken.org

※聞見会は浄土真宗本願寺派僧侶の釋慈海が主宰する聞法の会です。

※本誌はフリーペーパー(無料)です。聞見会員ならびに賛同して下さっている方々の御懇志とご協力によって発行しています。

合掌

なもあみだぶつ